むすこのほうけいち〇ぽをむこうとするはは
息子の包茎チ〇ポを剥こうとする母

中村家の母である中村 恵(なかむら めぐみ)は、
家事を一通り終えた夜、
リビングのソファーでくつろぎながら
スマホでネットサーフィンをしていた。
「さてさて、面白いニュースはあるかな～」
ニュースサイトを見ながら様々な情報を仕入れていく。
そんな中……
「ん？ なにこれ？」
恵の目に止まったのは、とあるサイトの記事だった。
「……包茎？」

「え！　うそ！　なにこれ！」
「包茎は立派な病気の一つです。
放置してしまうと陰部に菌が繁殖し、
炎症をおこすこともあります……」
「包茎には仮性包茎の他に真性包茎というものがあり、
これは手術しないと治らないものが多いです。
なので、もし子供さんが真性包茎の場合には
早めに泌尿器科を受診することをオススメします……」

「包茎ってそんなにヤバイことなの？
ただ皮を被ってるだけかと思ってた……
うちの子は大丈夫かしら？
小さい頃は皮を被ってたけど……
もっと、詳しく書いてないの……？」

「……え！
大人になっても剥けない人もいるって……
うそ！　治らない人もいるの!?
うそでしょ！　ヤバいじゃん！
うちの子は大丈夫よね？
ちょっと、怖いんだけど！
うそでしょ……どうしよう
治療の方法は書いてないの！」

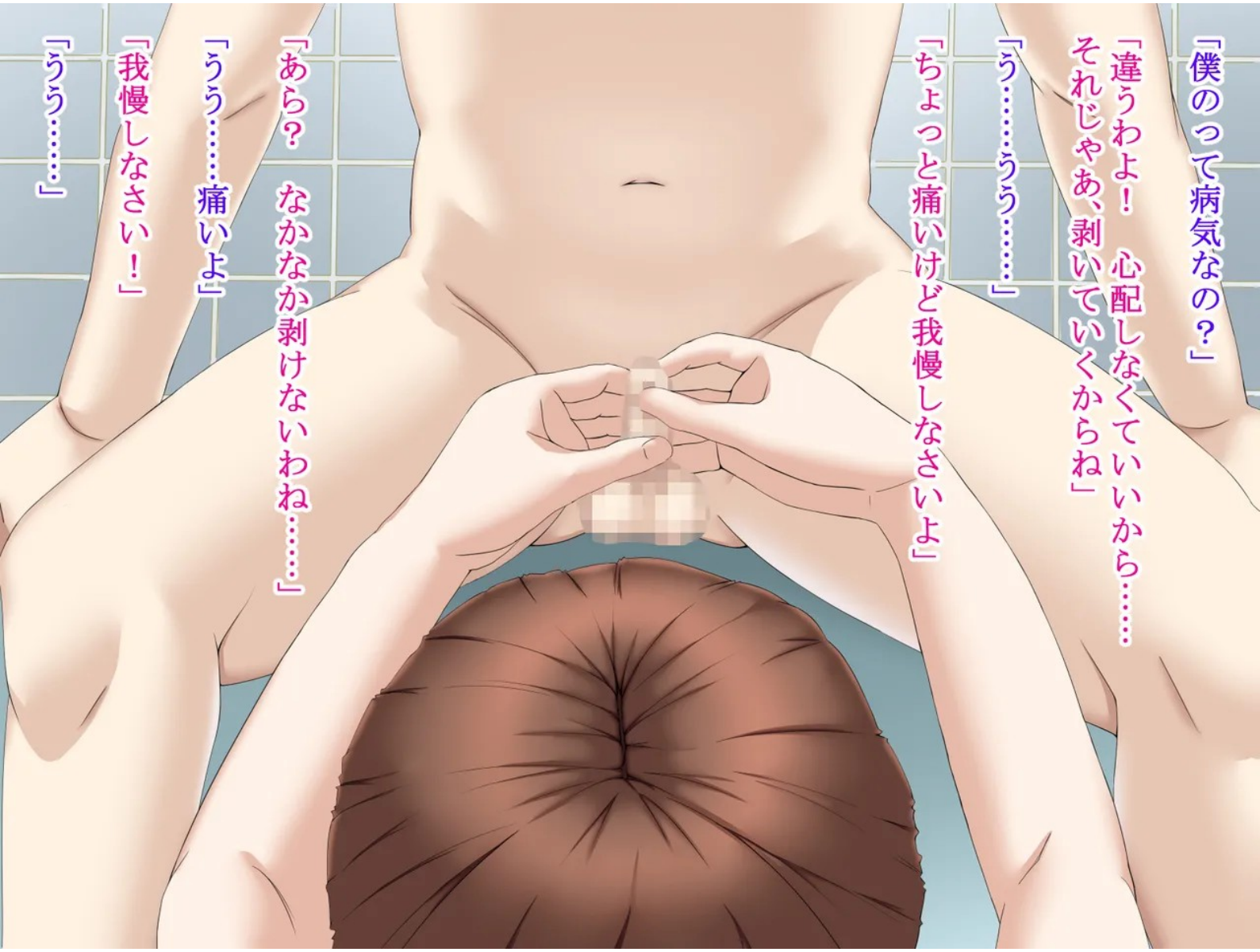
「刺激を与えて、
徐々に慣らすのがオススメです……」
「慣らす？　慣らすって何よ。
でも刺激を与えるって具体的にどうすれば……
入浴時に剥く？
え！　そんなんでいいの!?」

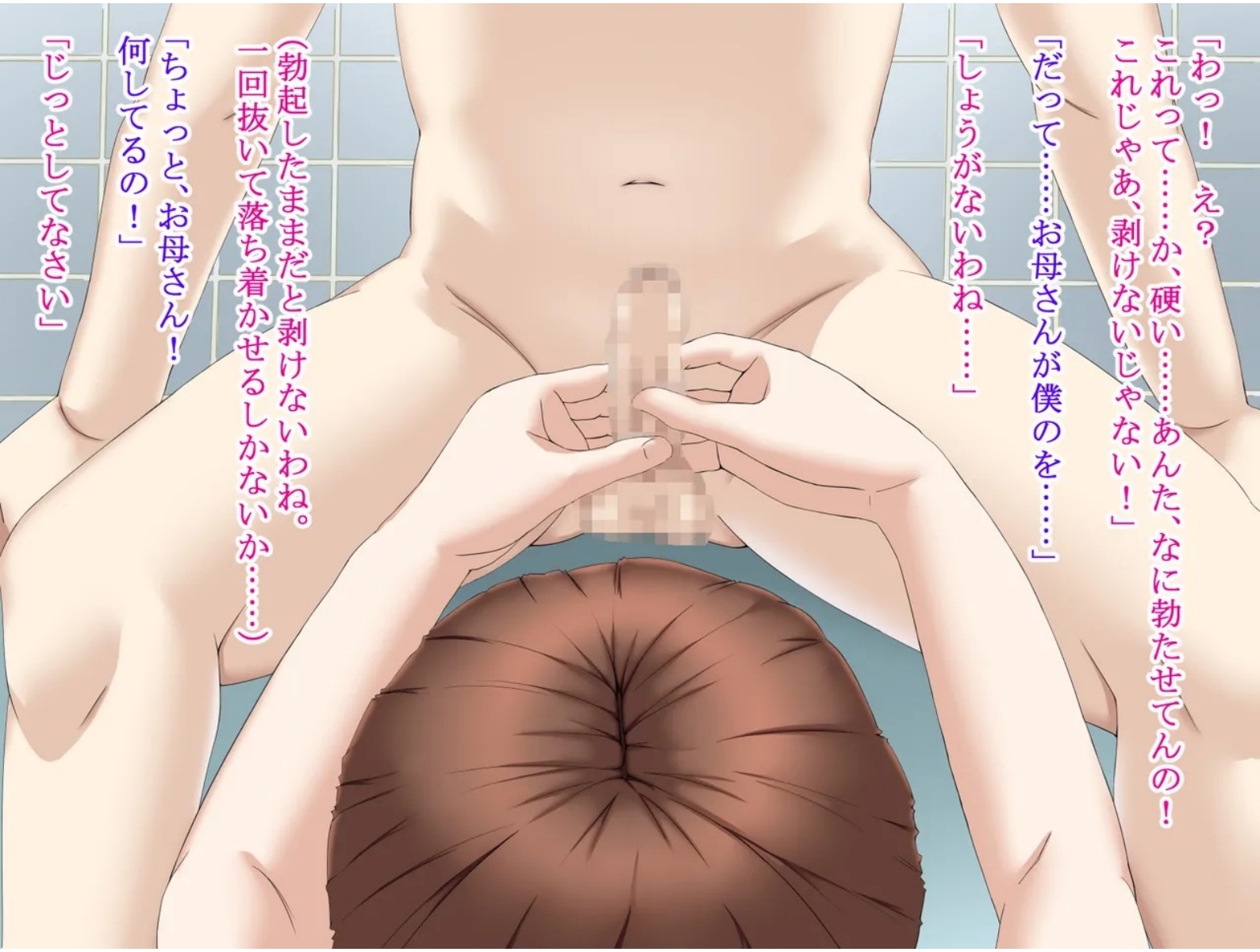
「うん、これなら私でもできるかも！
治らなかったらどうしようかと思った。
あぁ、良かったぁ。
そういえばあの子、今お風呂に入ってるところだったわね。
ちょうどいいかも、さっそくお風呂で試してみようかな」

「裕太！
ちょっと話があるんだけど……」
「何!?　お母さん？」
「あんた、包茎なの!?」
「えっ！　何で急に!?」
「この記事に書いてあったの！
裕太！　あんた、包茎なの？」
母はスマホを息子に見せ、ネットの記事を読ませた。
「どうなの！」

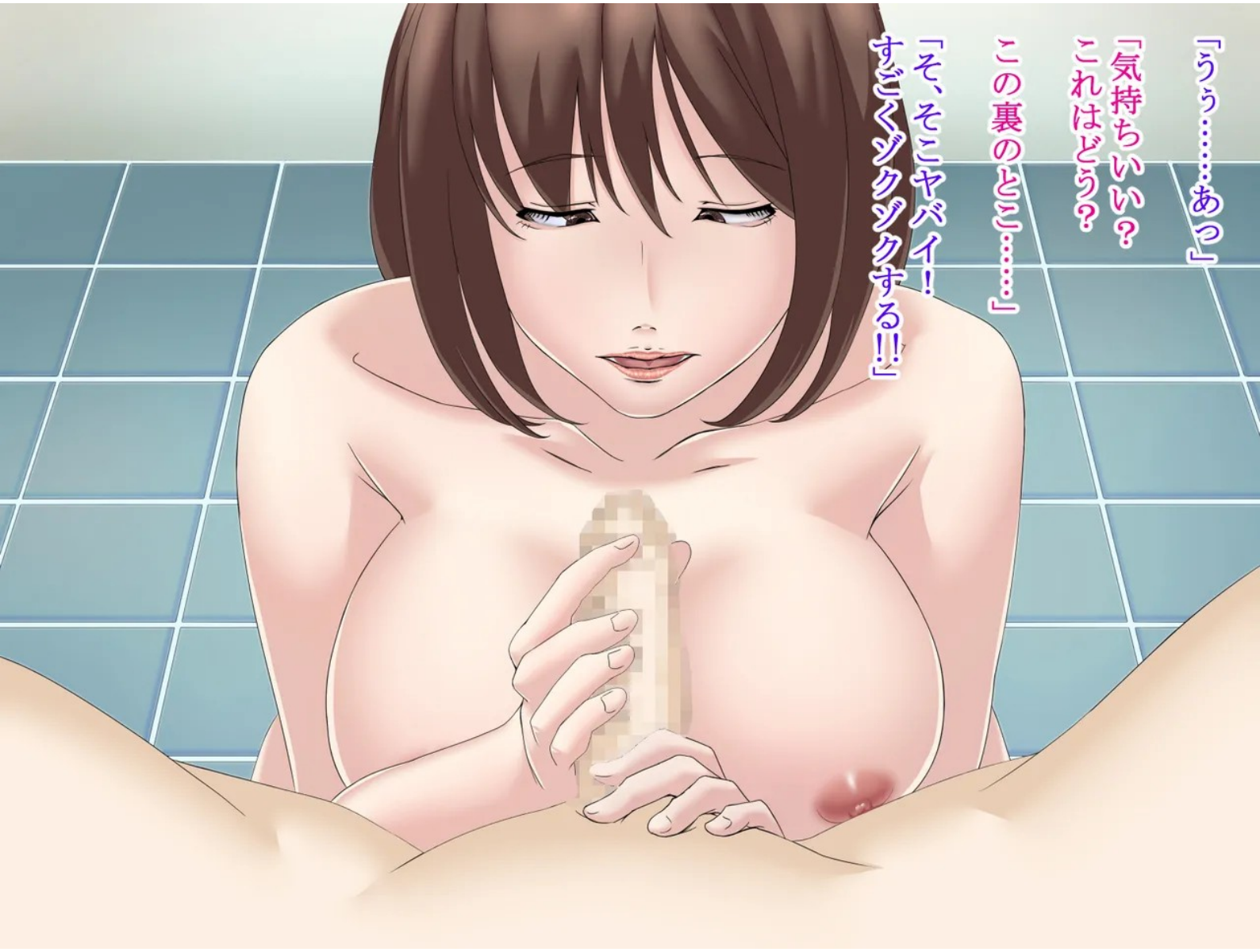
「さあ……　分からないよ」
「分からないってあんた、自分の事でしょ？
被ってたら大変なことになるのよ。
全く、しょうがない子ね。
ほら、見せてみなさい！
病気になったら困るでしょ！」

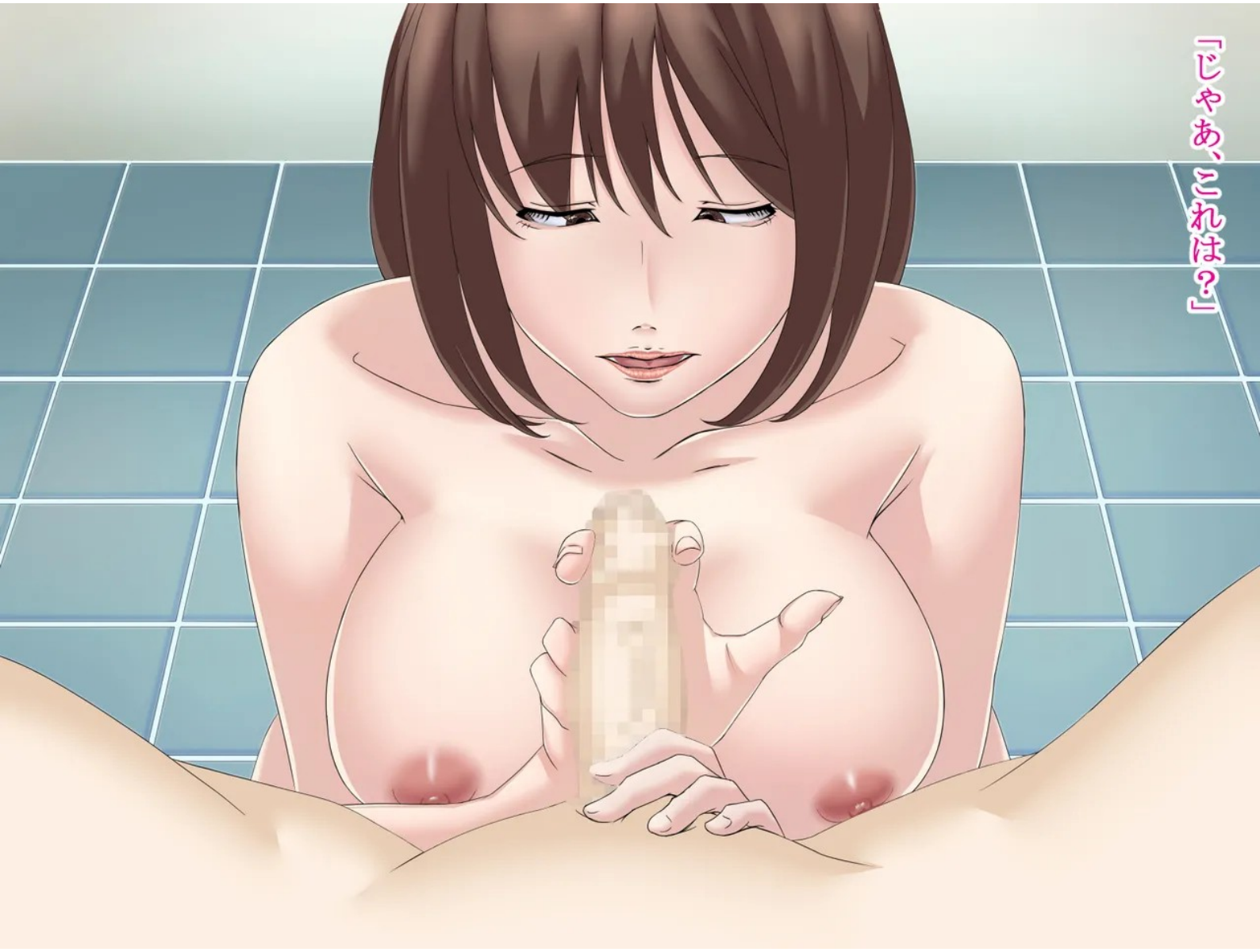
「あんた、剥けてないじゃない！」
「剥けてるって、何が？」
「何がって、この写真の男の人たちみたいに先っぽがみえてるってことよ」
母はスマホを息子に見せた。
その画像には、そそり立った男性器の写真が載っていた。
「あんた！　何でこれで剥けてると思うのよ！」
「えっ？　だって……　これって普通でしょ？」
「どこが普通なのよ！　あんた病気になるわよ！」
「お母さん、何怒ってるの!?」
「あんたが病気になると、病院代もかかるし、恥ずかしいでしょ！」
「うん……」
「とにかく……　これからあんたの包茎を治すわよ！」

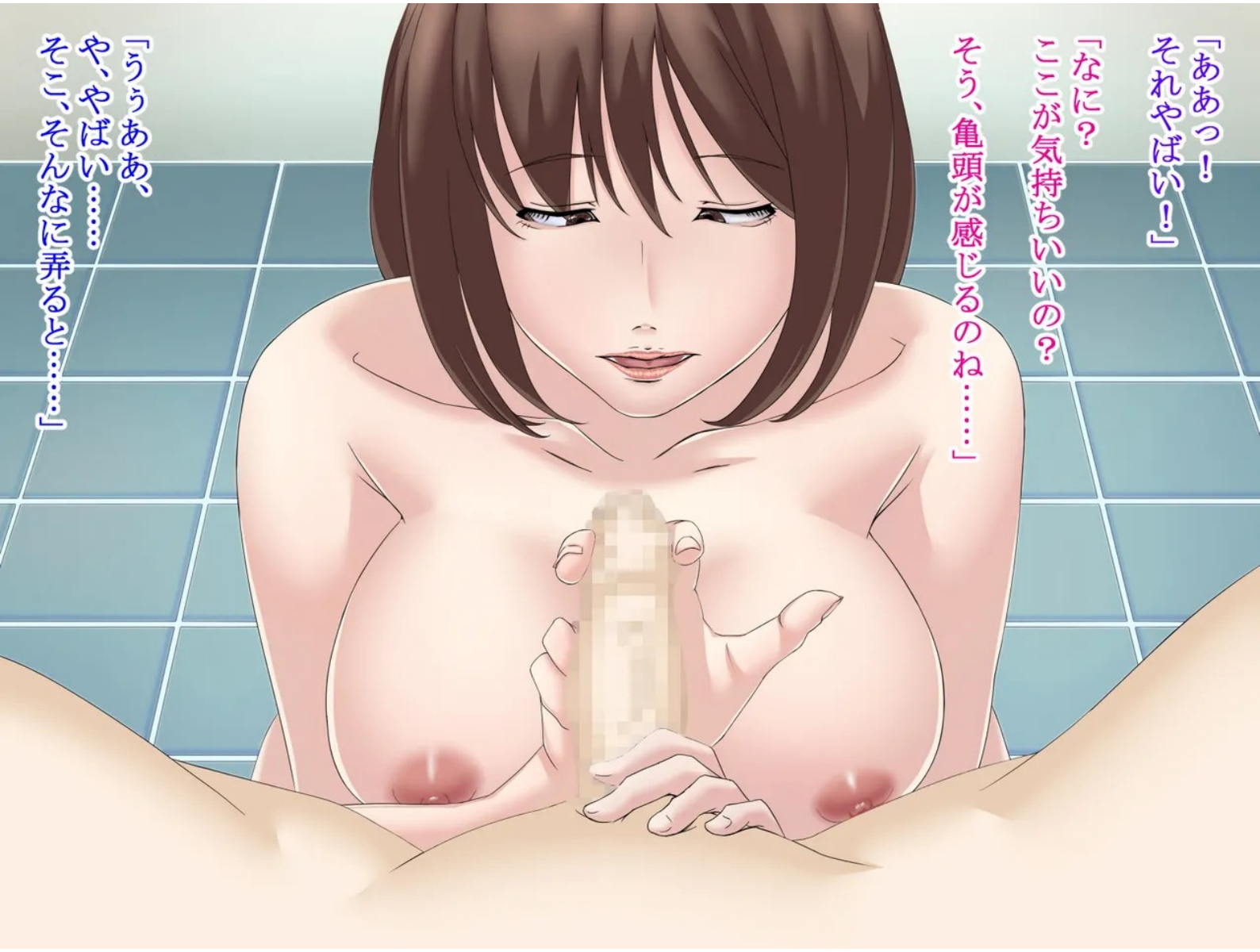

「僕のって病気なの？」
「違うわよ！　心配しなくていいから……
それじゃあ、剥いていくからね」
「う……うう……」
「ちょっと痛いけど我慢しなさいよ」
「あら？　なかなか剥けないわね……」
「うう……痛いよ」
「我慢しなさい！」
「うう……」


「わっ！　え？
これって……か、硬い……あんた、なに勃たせてんの！
これじゃあ、剥けないじゃない！」
「だって……お母さんが僕のを……」
「しょうがないわね……」
（勃起したままだと剥けないわね。
一回抜いて落ち着かせるしかないか……）
「ちょっと、お母さん！
何してるの！」
「じっとしてなさい」

「い……いや……」
「気持ちいいでしょ？」
「う……うう……」
「ここはどう？」
「うあ……お母さん」
「ん？
気持ちいい？」
「うん、そこ、先っぽが気持ちいい……」
「それならよかったわ。
じゃあ、ここを重点的に攻めてあげる」
（お母さんの手が気持ち良すぎるよ……）

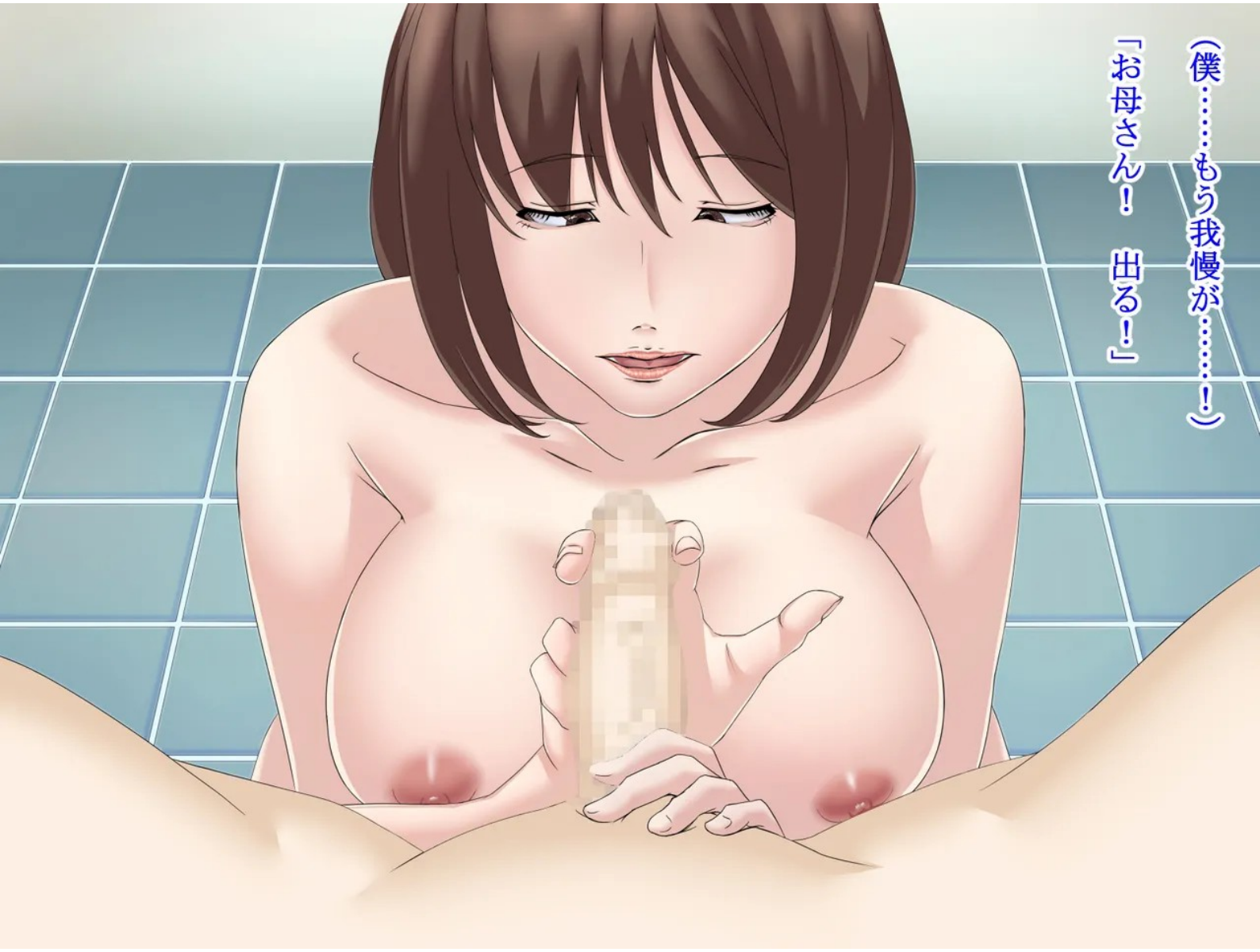

「うぅ……あっ」
「気持ちいい？
これはどう？
この裏のとこ……」
「そ、そこヤバイ！
すごくゾクゾクする!!」


「じゃあ、これは？」


「ああっ！
それやばい！」
「なに？
ここが気持ちいいの？
そう、亀頭が感じるのね……」
「うぅああ、
や、やばい……
そこ、そんなに弄ると……」

「あら？　もうイきそう？」
……
「うぅ……」
（こんなにパンパンにしちゃって……
しょうがないわね。
あれ？
なんかさっきより……）

「ちょ、ちょっとお母さん！
何でそこばっかり弄ってるの!?」
「何言ってるのよ、ここを刺激したら射精するでしょ？」
「亀頭を集中的に弄ってあげるから、
さあ、イきなさい！」
「はぁっ！
は、速いよ！
お母さん!!」


（僕……もう我慢が……！）
「お母さん！　出る！」

「ああっ!!」

（うっわ～すごい量……
若い子ってこんな量の精液が出るの？）

「はあっ……はあっ……」
「どうだった？」
「……気持ち良かった」
「そう、それはよかったわ。
これで皮が剥けるようになるでしょ。
じゃあ、剥いていくわよ」

「あら？
なかなか、剥けないわね……」
「母さん、そんなにやると痛いよ……」
「む、難しいわね……
ごめんなさい。
どうしましょう……」
（……う～ん。
そうだわ。
口の中でやったらどうかしら？
唾液が潤滑液になって、
剥けるかもしれないわ）
「ちょっと待ってなさい。
出した精液きれいにするから……」

「よし、きれいになった。
裕太、お母さん今から裕太のおちんちん
剥きやすくするから
ちょっと、おちんちん突き出しなさい」
「こう？」
「それじゃあ行くわよ……」

「わあっ！
お母さん！
何やってるの!?」
「手で剥くのは痛いでしょ？
だから、こうして唾でぬるぬるにして剥くのよ」
「でも、そんなとこ咥えたら汚いよ」
「仕方がないでしょ！
ぬるぬるにするのは、
こうするのが一番手っ取り早いんだから」

（まずは、このまま下の方に動かして
剥いてみましょうか）

「っふむ……」

「クチュクチュ……」

（ダメね、全然剥けない）
「んー……」
（じゃあ、次は先端の方を舌で舐めて
皮の間に唾液を入れてみましょうか）

（こんなもんかな？
それじゃあ、もう一度……）
「クチュクチュ……」

（んー？
これもダメだわ……
全然剥けてる感じがしない）
（じゃあ、次はどうしましょうか……
そうだわ！
先端の部分をもっと舐めてみましょう
そうすると、ふやけて剥けやすくなるかも！）

チロチロレロレロ……
「ん、んあっ……」

（え？）

（勃起してる？
なんで？
さっき射精したばかりじゃない……
若いからかしら？
もう一回射精させるのも大変そうだし、
こんなにぬるぬるにしたんだもの
勃起してても剥けるかもしれないわ……
今度は、舌で皮を押し下げて剥いてみましょうか）

（これでどうかしら？
この調子で、何度か動かしてたら
剥けるんじゃない？）
「うぅ～……くぅ……」

（……う～ん。なかなか剥けない）
「ん、はぁ……ふーふー……」

（やっぱり、根元を押し下げて剥いていく方がいいのかな？
唇で根元まで押し下げるようにして剥いてみましょうか）
じゅぶじゅぶ……
「うっ、んあぁっ！」

（ん、なかなか剥けないわね……
ここをこうしてもだめかしら……）
「か、母さん……
ねえ、ねえってば！」

「ん、ああっ……
だめだ、そんなにすると……」

「んん……ああっ!!」
「うんぐっ！
ごぼっ!!」

「こほっ！」
「げほっげほっ!!」
「あ、あんた！
なに勝手に出してんの！」
「はぁ……はぁ……げほっ……」

「鼻に入ったじゃない！
「だって、お母さんがあんなにするから……」
「だからって、急に出すんじゃないわよ！
出すなら出すっていいなさい！」
「……ごめんなさい」
「わかったならいいわ……」

「お母さん、ちょっと疲れちゃったから
今日はこのくらいにしましょう。
裕太も2回も射精して疲れたでしょ？
少し剥けた感じがするし、
この調子でいけば全部剥けるかもしれないから。
あんまり負担をかけても痛いだけだと思うし、
すぐに全部剥けないと思うけど、
続きは、また明日にしましょう」

「裕太、いる？」

「ん？
母さん何？」

「今日もおちんちんの皮を剥く練習をするわよ」

「え？
僕の部屋でやるの？」

「そうよ。
剥くくらいなら、どこでだってできるからね。
それに、毎日やらないと剥けないんだから」

「前みたいに、唾をつけるの？」

「いいえ、今日はおまんこの液でやるわ」

「え！？」

「おまんこの液のほうが、人由来だから、
おちんちんに浸透しやすいかもしれねいからね」

「じゃあ、お母さん準備するから
ちょっと待ってなさい。
すぐにおまんこの液を出すから……」

クチュ……クチュクチュ……

クチュクチュ……クチュクチュ……
「ん、んふぅぅぅ……んん……」
「お母さん、何してるの？」
「んぅ……おまんこの液を出してるのよ……」

「ふー……んふぅ……」
「そこ弄ったらどうなるの？」
「だから、おまんこの液が出てくるのよ。
お母さん集中したいから
少し黙ってなさい……」

「ハァハァ……んあぁぁ……」
クチュクチュクチュ……
「おお、すごい液体が出てきたね」
「……うん、ええそうね」
クチュクチュ……

「だいぶ、濡れてきたわね。
裕太、ちょっとこっちに来て、
お母さんの前に座りなさい」

「こう？」
「そう」
「じゃあ、こすりつけて
液をつけていくからね」

「んぅ……」
「どんな感じ？
剥けそう？」
「いや、全然」
「……そう
じゃあ、
このままこすり付けていくからね」

「んぅう……はぁ……はぁ……ふぅー……」
「まだ？」
「ちょっと待ってなさい。
もうちょっとだから……」
「はぁ……はぁ……」

「んっ、あふぅ……」
「くちゅくちゅ音が鳴ってるね」
「……そうね。
これなら、剥けるかもしれないわね……」
「ん……うふぅ……ふぅ……ふぅ……っあ
……だめっ……」

「んああっ！」

「どうしたの？」
「べ、別に！
何でもないわよ！」
「でも……」
「何でもないって言ってるでしょ！
それよりおちんちんはどうなの！」
「ダメだよ全然剥けてない」
「そ、そうなの……
残念だわね
でも、毎日やっていけば
ちゃんと剥けるようになるから
また、明日やりましょ」

「さ、お母さんは後片付けするから、
裕太も着替えちゃいなさい」
「……」

「え？」

「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、……」
「ゆ、裕太!?
なにしてるの！
離しなさい！」
「ああ、気持ちいい……」
「ちょっと、裕太！
聞いてんの！
離しなさいって言ってんの!!」

「ん、ん、ん、んっ……」
「あ、あっ、ああっ……やばい気持ちいい……
で、出る！」

「出るってあんた！
ちょっと！」
「ああっ！」

「ん、ぅんん……!!
あぁあっ……」
「ちょっと！
何？
裕太ぁ!?
出してるの!?
ちょ、ちょっとやめなさい！
おちんちん、抜きなさい!!」

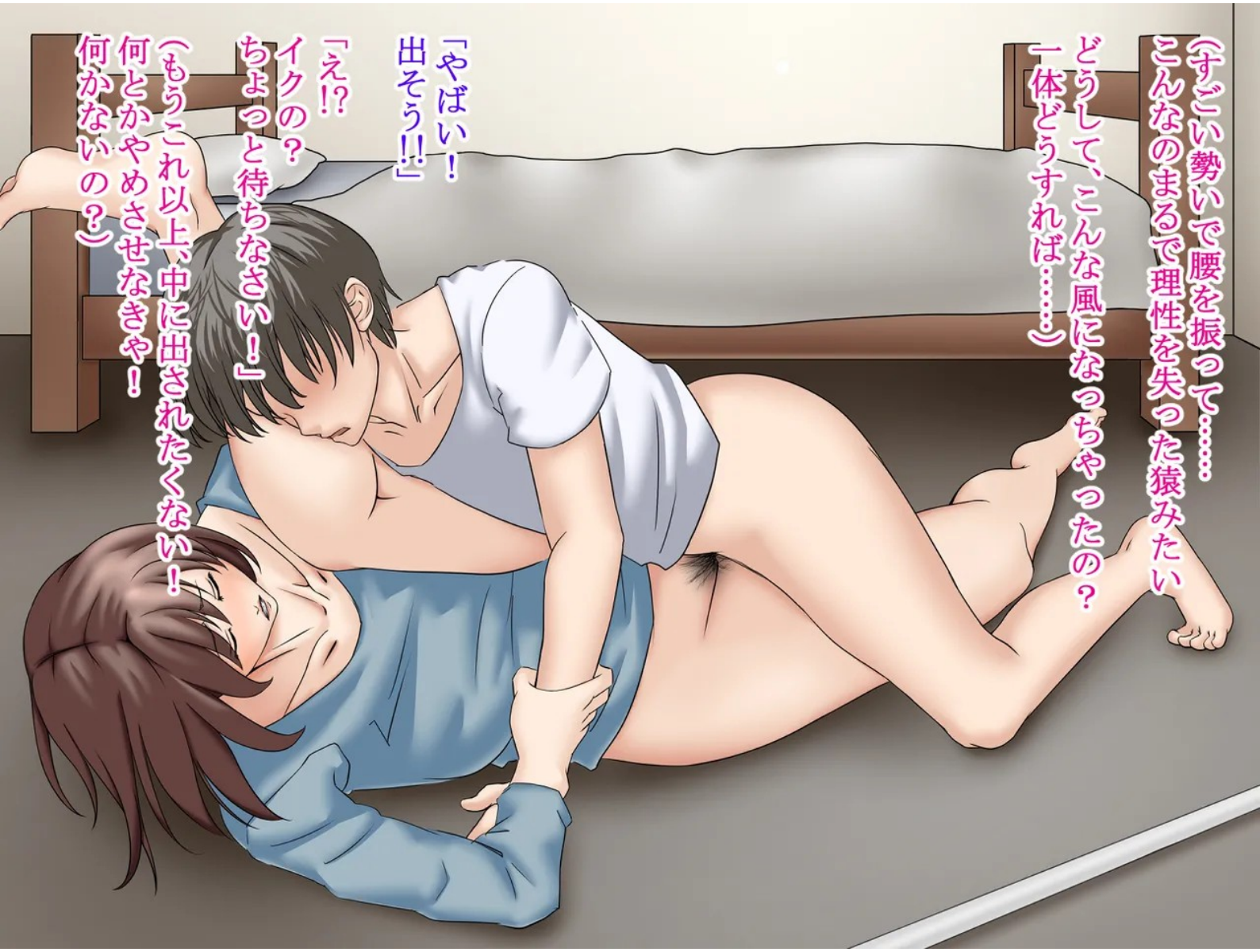
「ん、はぁ……はぁ……」
「裕太……
中に……出しちゃったの？」
「母さん、気持ちよかった……」
「あんたって子は……
なんてことしてくれてんの」
「はぁ……
やっちゃったものは仕方がないわ
さあ、もう退きなさい。
お母さん、ピル貰いに産婦人科行くから……」

「裕太？
ちょっと、離しなさいって言ってるでしょ？
どうして離れないの？」
「母さん、僕まだ……」
「え？」

「裕太!?」
「もっとしたい。
やらせて」

「や!?」
（この角度……
気持ちいい所に
あたってる……）
「ん、ん、んん……」
（ダメッ！
何度も中に出されちゃったら
妊娠の確率上がっちゃう！）

「裕太！
何でも好きな物買ってあげるから
やめなさい！」
「ハァッ、ハァッ、ハァッ……」
（ダメだわ、
セックスに夢中になりすぎて、
聞こえてないみたい
どうしよう……）


（すごい勢いで腰を振って……
こんなのまるで理性を失った猿みたい
どうして、こんな風になっちゃったの？
一体どうすれば……）
「やばい！
出そう!!」
「え!?
イクの？
ちょっと待ちなさい！」
（もうこれ以上、中に出されたくない！
何とかやめさせなきゃ！
何かないの？）

「あっ！」
（あんなところに棒が！
あれだわ！
あの棒を使ってこの子を引き離せば……）

「ああっ！」
（ダメ！
逆に利用されちゃった！）

（やばい！
力入ってきてる
がっちり体を固定されて動けない！
しかも、この体勢
奥にまであたって
感じちゃう。
そのせいで力が入らない
腰が砕けそう！
やばい、この体勢で何度も突かれると
イっちゃう！）

「あっ、ああっ!!
もう、出る!!」
「イ……イクッ!!」

「あ、ああっ！」
「んんっ、
イ、イってる……」
（すごい……
中がヒクヒクして止まらない
何度も、精液を流し込まれて、
お腹が圧迫されてその苦しさで
何回も気持ちいいのが押し寄せてくる……
こんなの頭がおかしくなりそう）

「はぁ……はぁ……
お母さんごめん……
気持ちよすぎて何も考えられなくて……」
「あんたって子は……」
「でも、見てこれ……ほら」
「え？　あんたそれ……」

「剥けてるじゃない！」
「お母さんのおかげだよ。ありがとね」
（まあ、アフターピル飲めば妊娠の心配はないし、子供を立派な男に成長させたって考えたら親としての責任を果たせたってことだし、これでいいのよね？）

―その日の夜

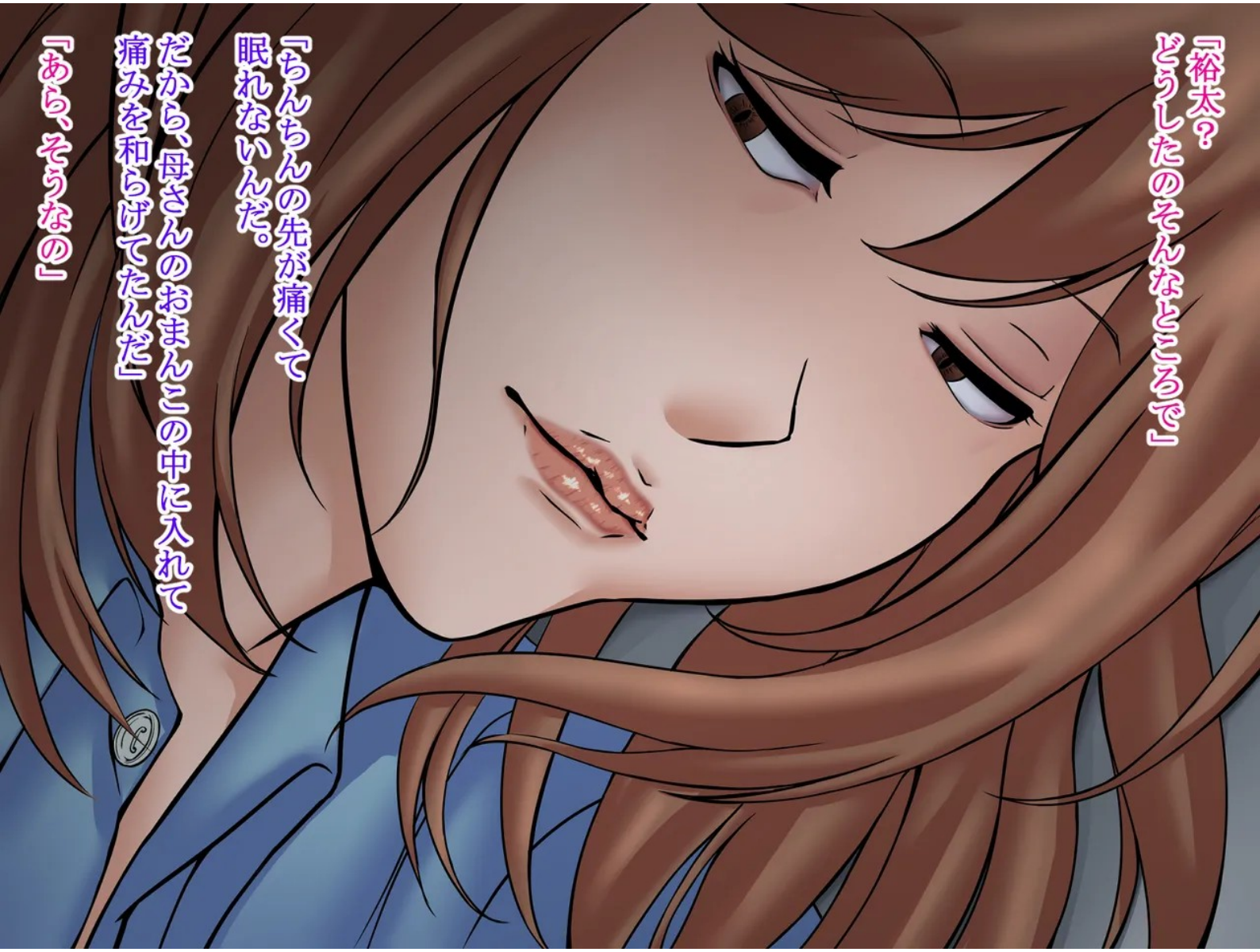
「ハァ、ハァ……」

『んぅ……出る……』

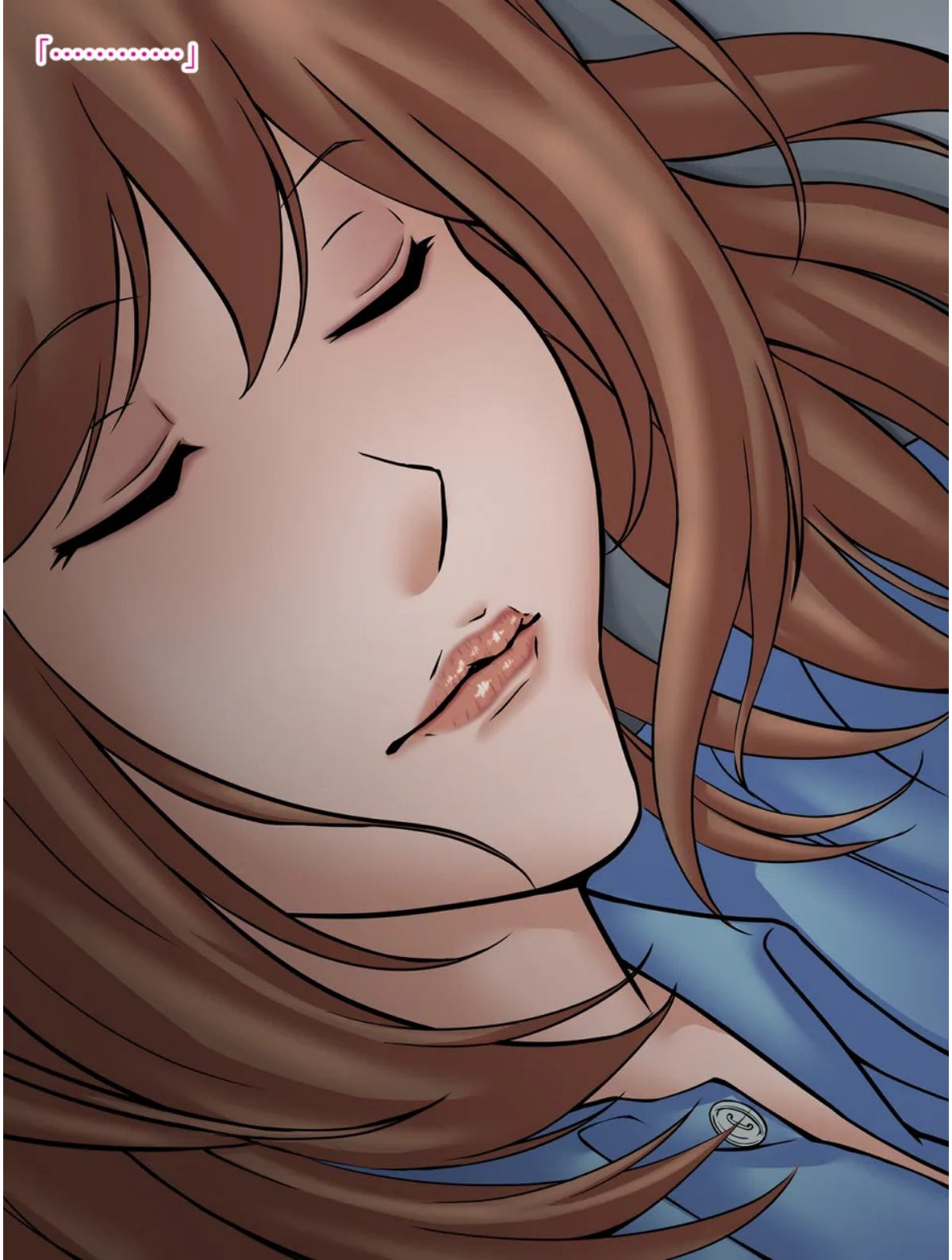
『うう……』
ドクドク……

「すー……すー……
……んん」

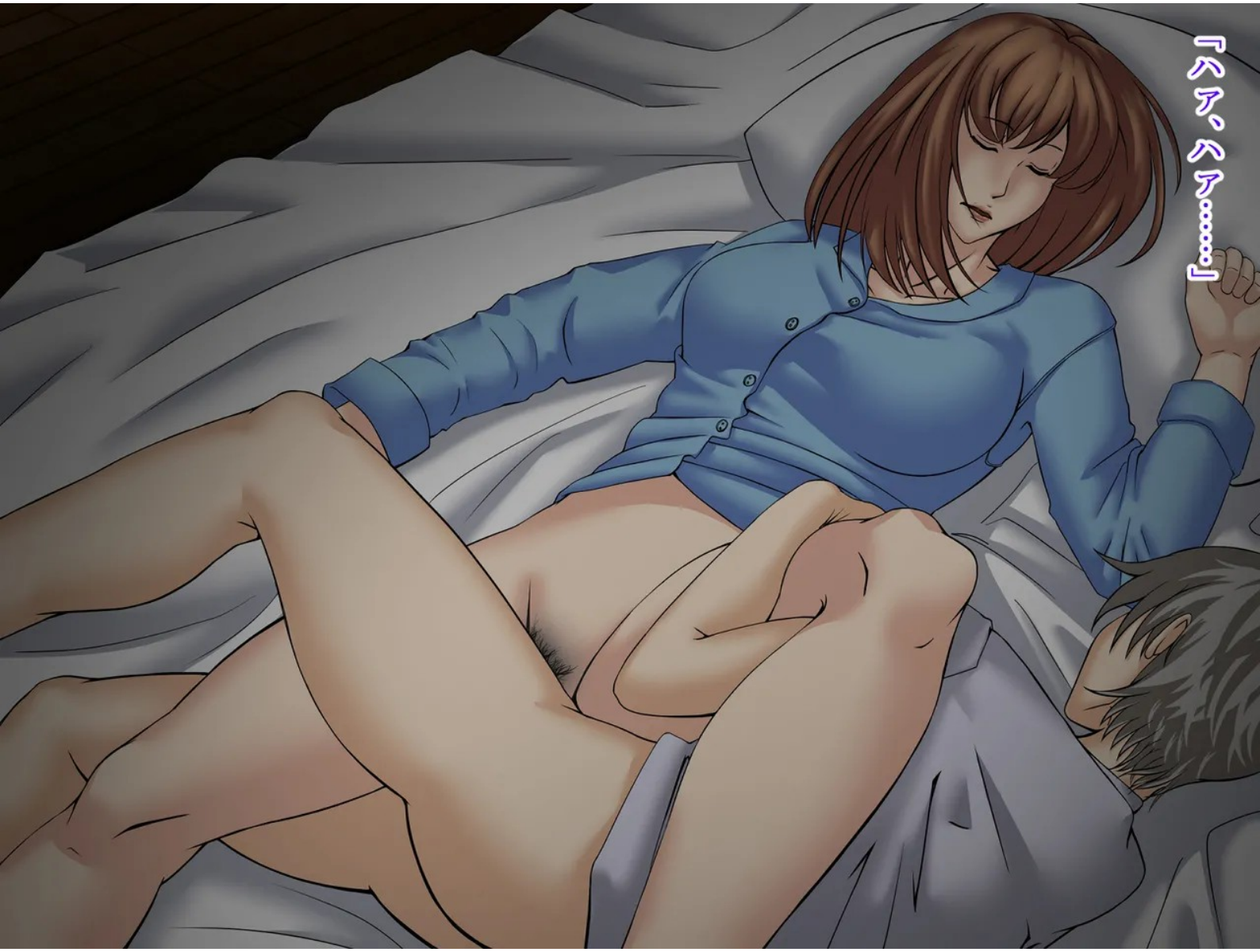
「……ん？
何……？」


「裕太？
どうしたのそんなところで」
「ちんちんの先が痛くて
眠れないんだ。
だから、母さんのおまんこの中に入れて
痛みを和らげてたんだ」
「あら、そうなの」

「おまんこの中に入れてたら
痛みがなくなるから、このまま入れた状態で
寝ていい？」
「そうなのね。
わかったわ。
じゃあ、このまま一緒に寝ましょう」



『すー……すー……』
『……』

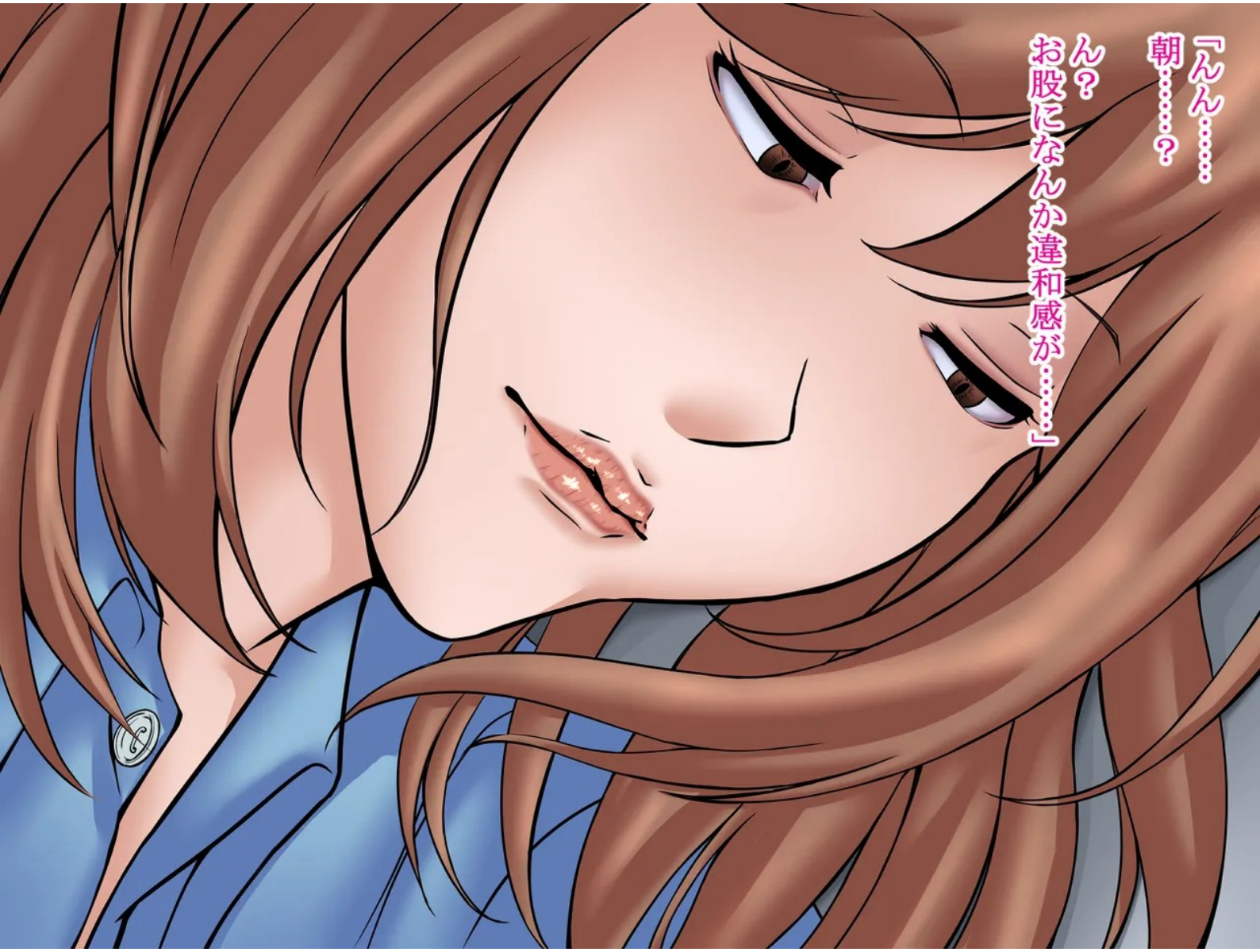

「ハァ、ハァ……」

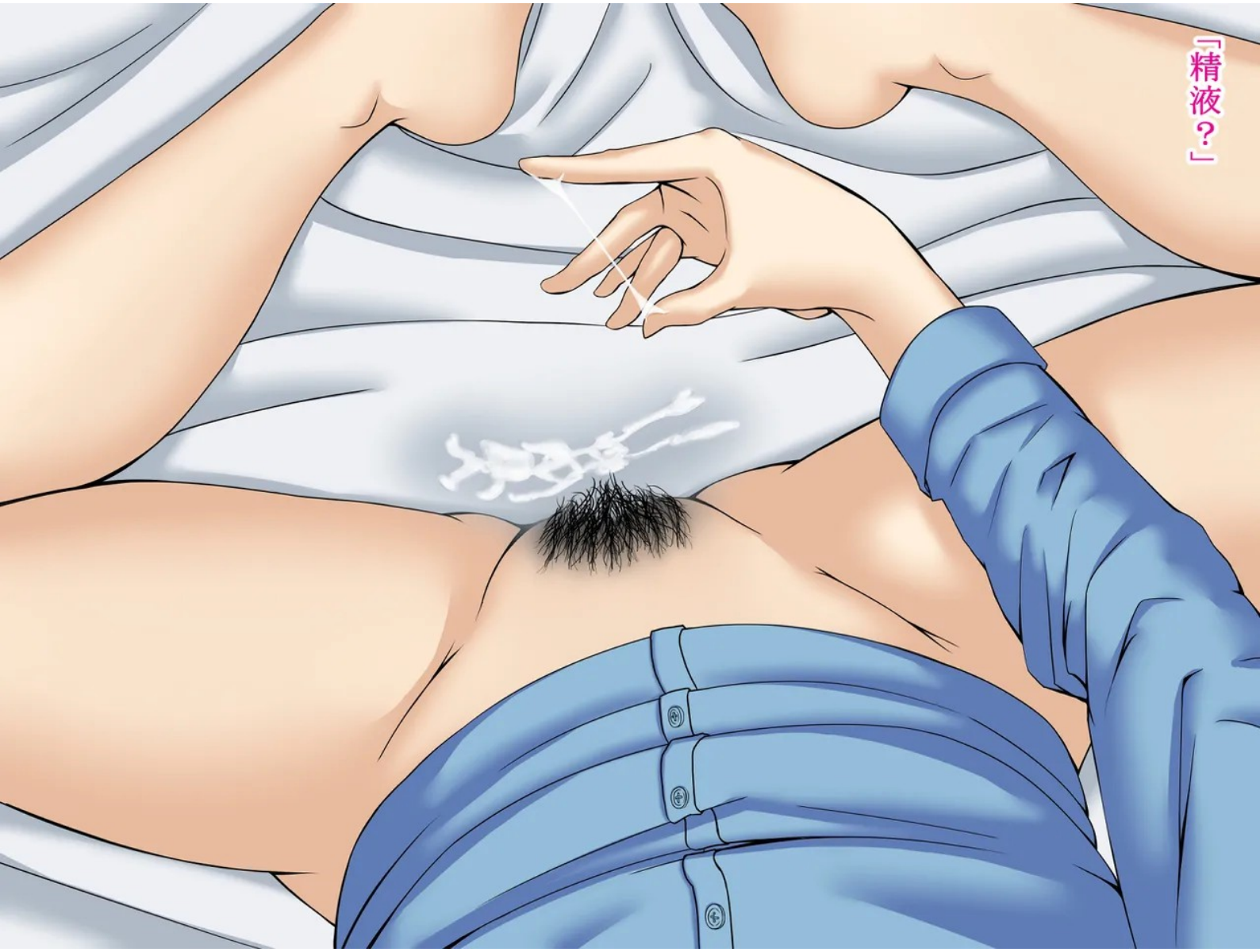
「やばい、気持ちいい……」

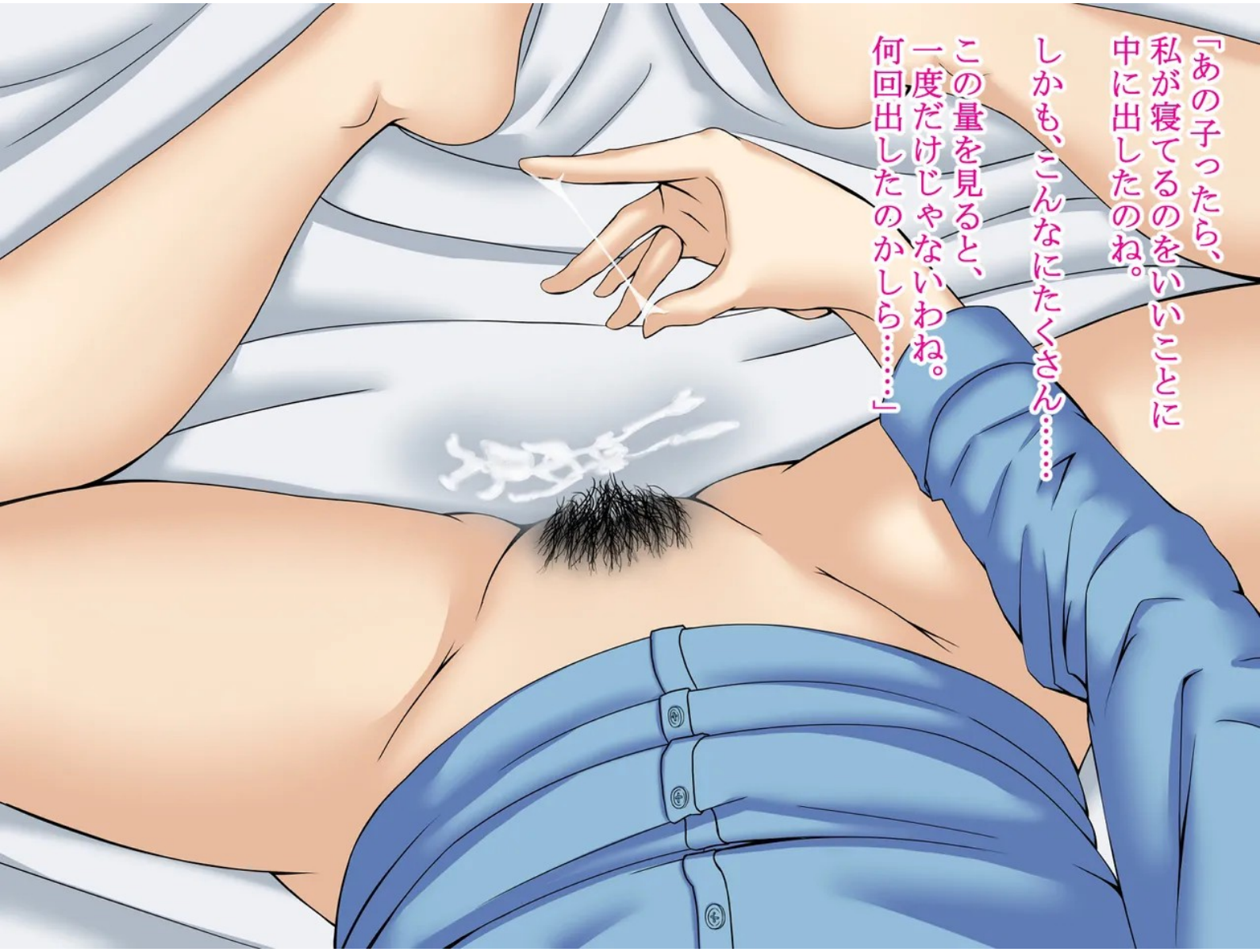
「ん、出る！」

『はぁ……はぁ……』

『はぁ……はぁ……』


「んん……
朝……？
ん？
お股になんか違和感が……」


「精液？」


「あの子ったら、
私が寝てるのをいいことに
中に出したのね。
しかも、こんなにたくさん……
この量を見ると、
一度だけじゃないわね。
何回出したのかしら……」

それから、裕太はおちんちんの痛みを理由にして
家中どこにいても私の体を求めるようになってきた。

洗濯物を干している時も――

洗い物をしている時も――

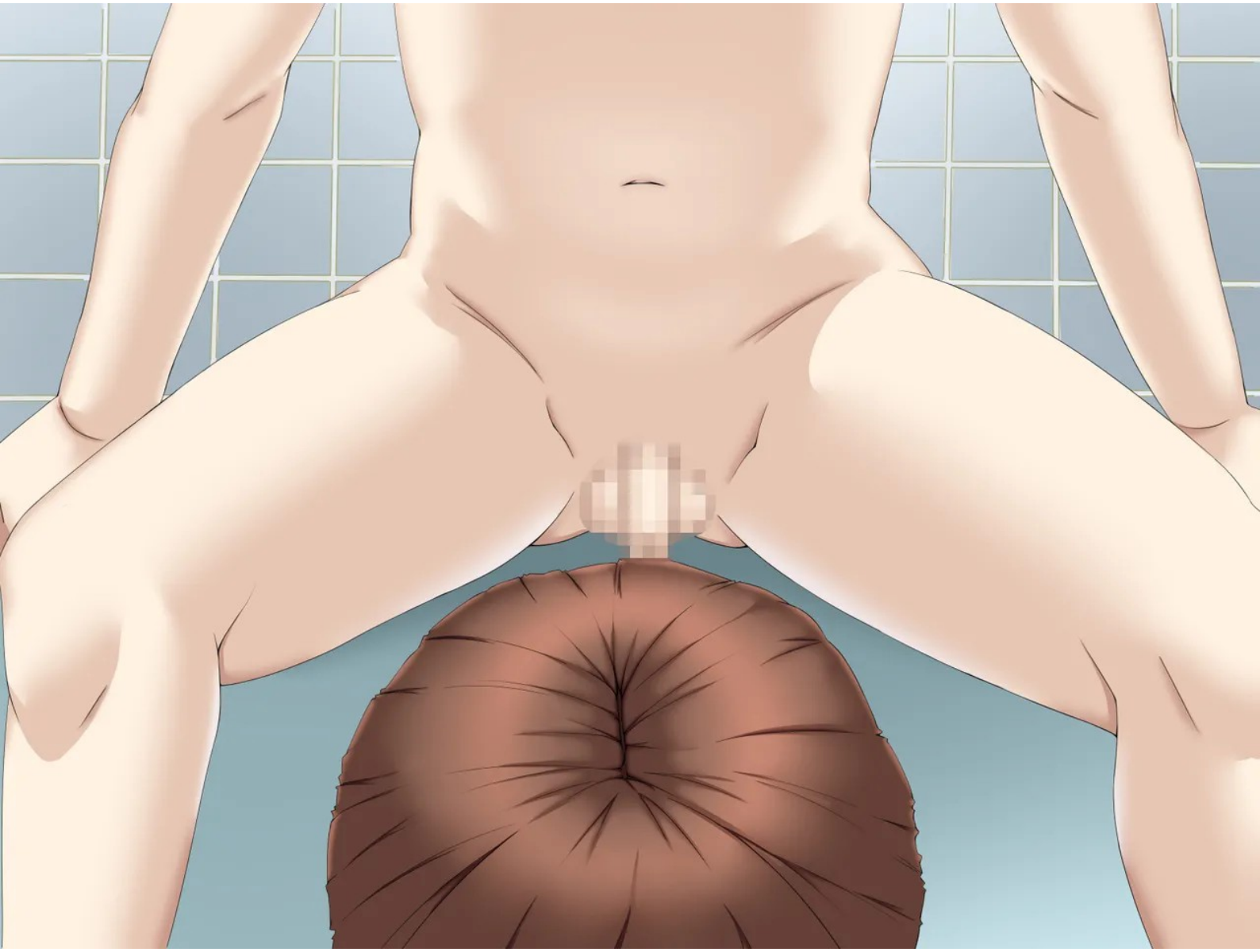
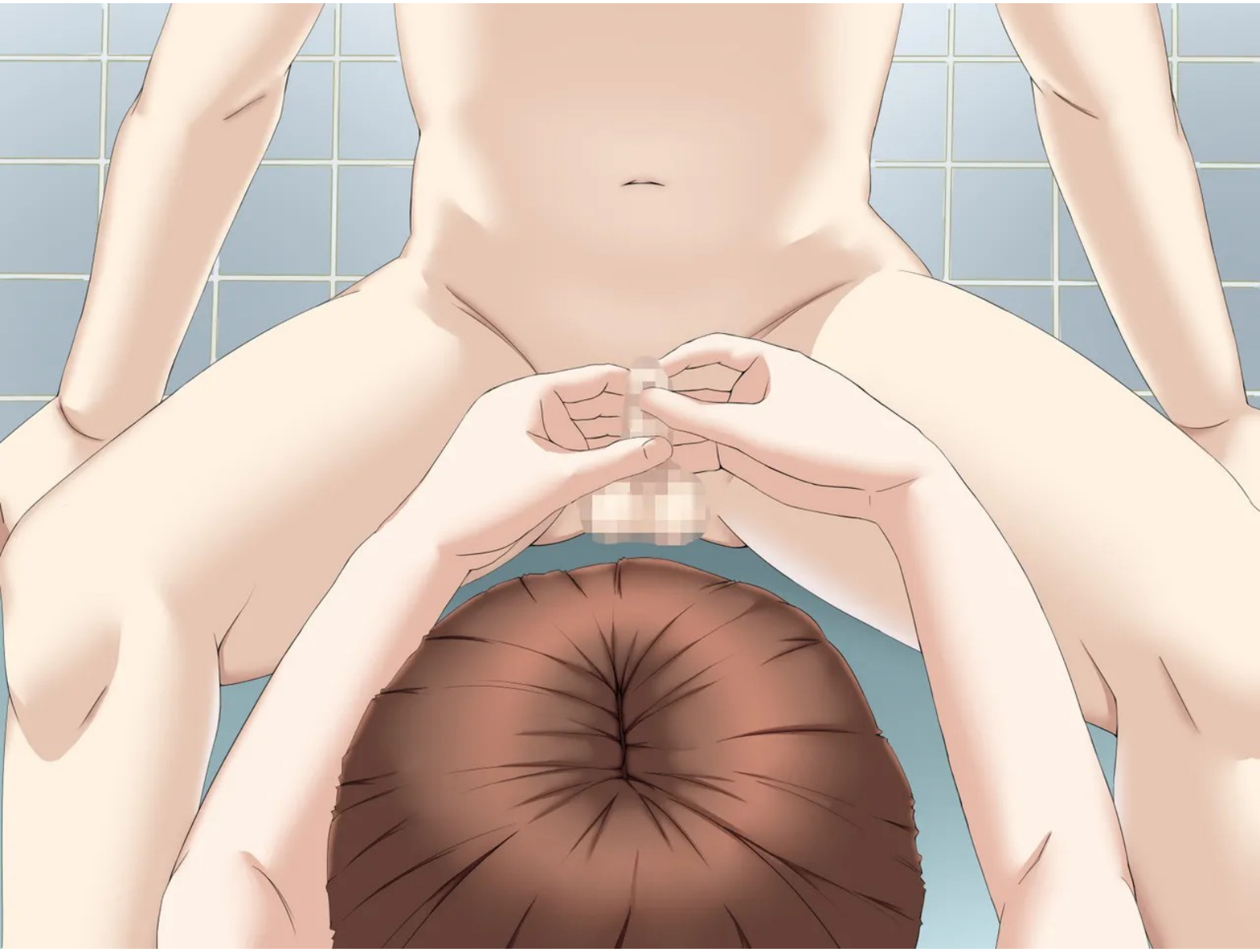
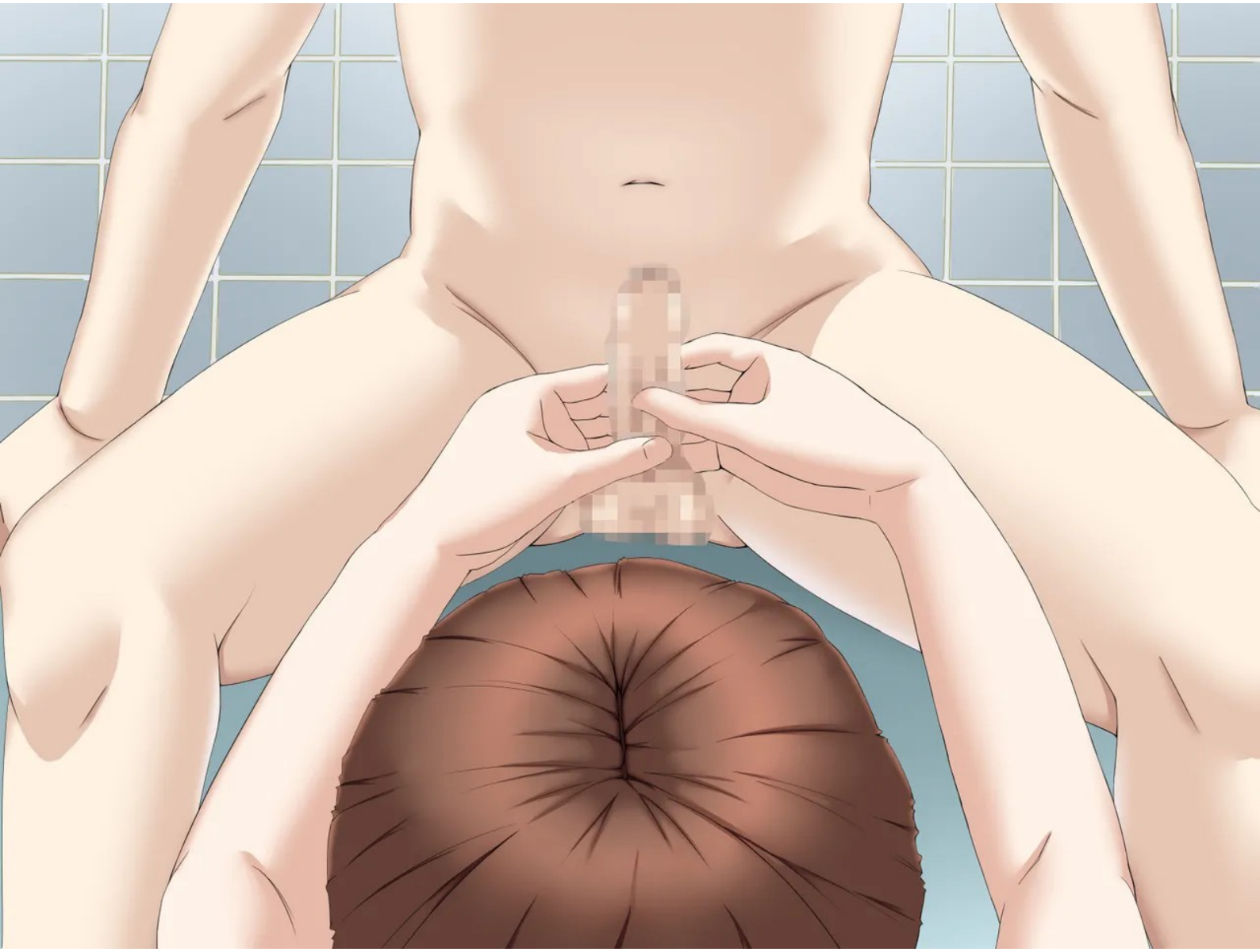
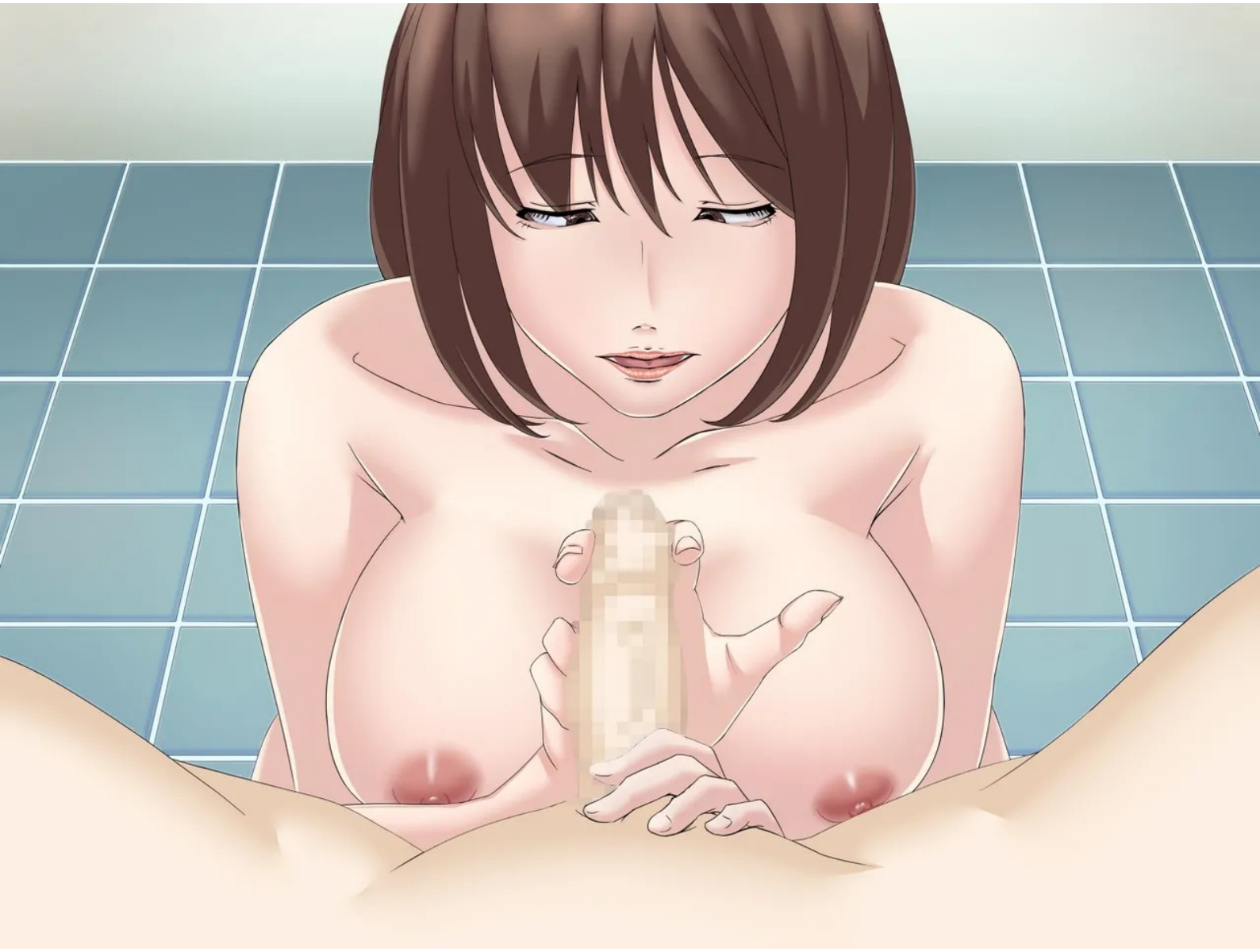
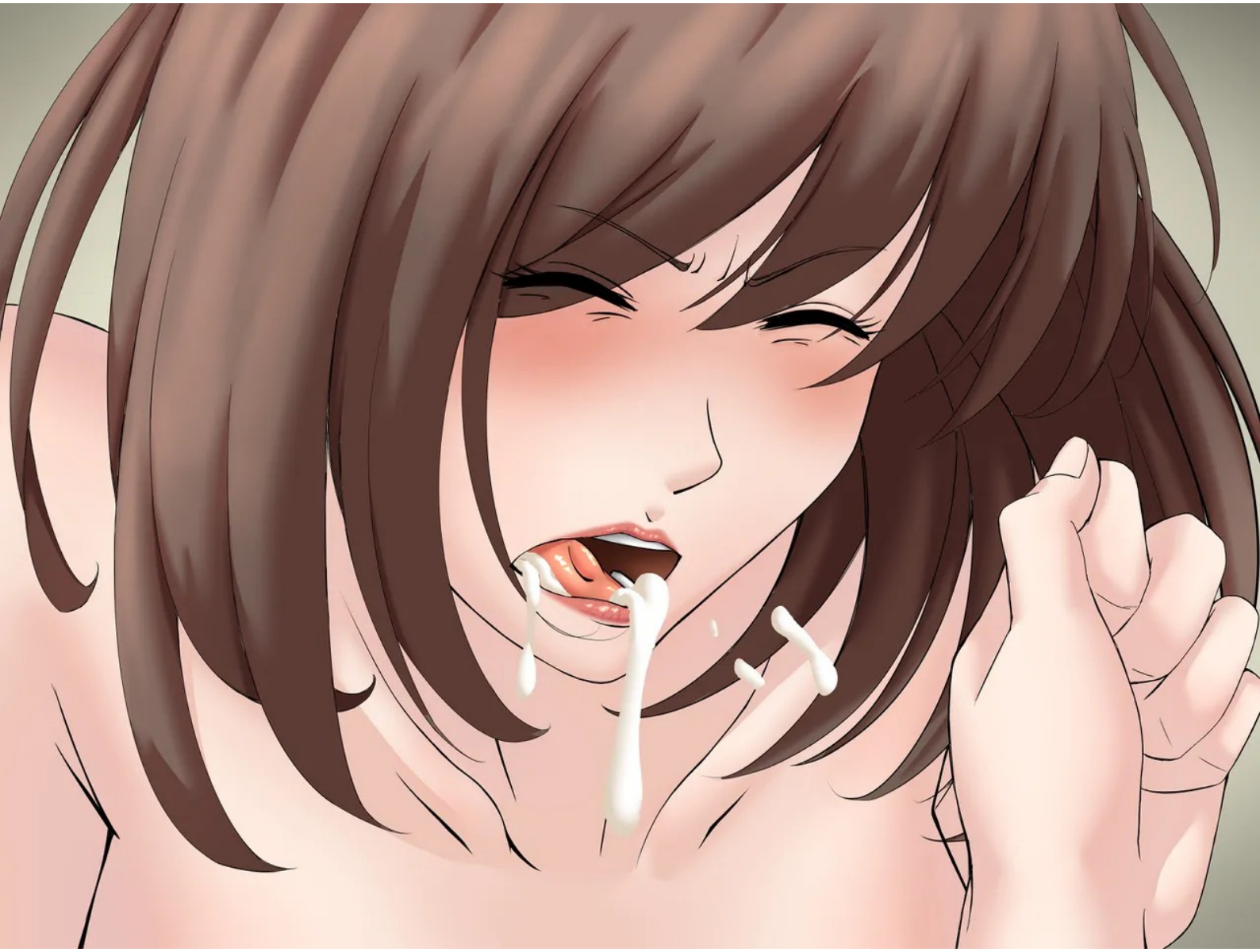
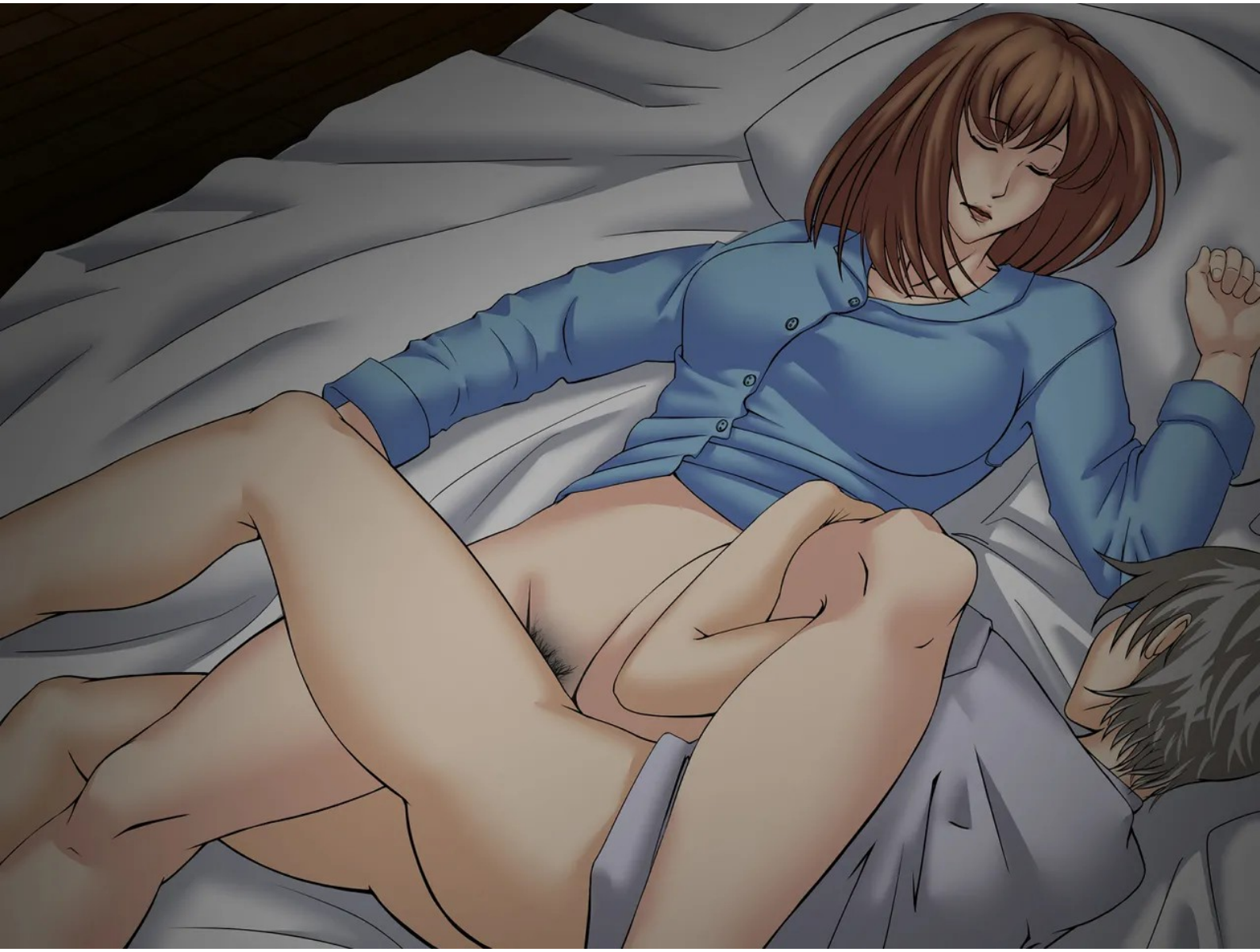
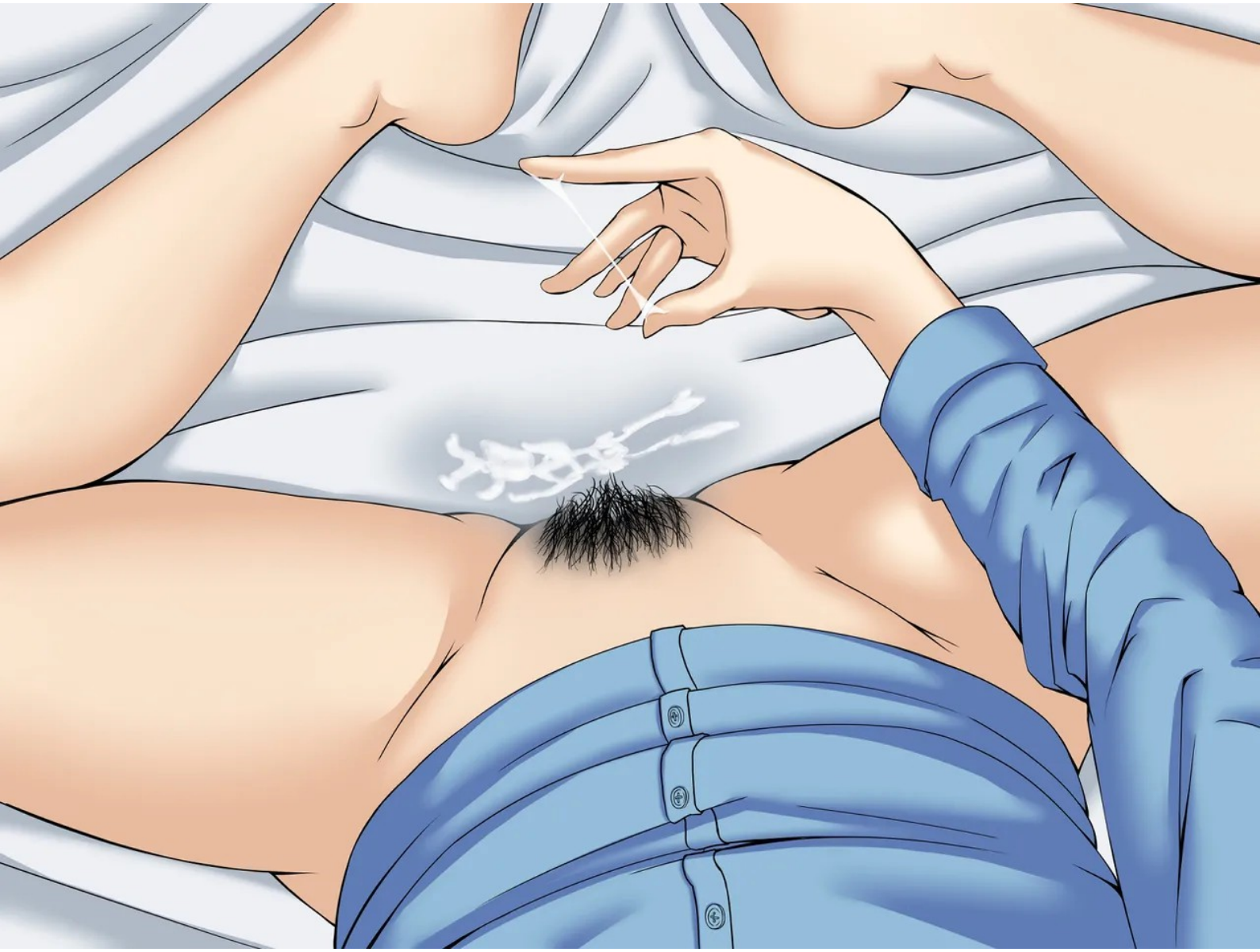
ご飯を食べてる時だって。

でも、それも最初だけで、
いつしか剥く練習も
セックスもしなくなって
何もない日々が続いていた。

「裕太、久しぶりに
おちんちん、どうなったか
見せてみなさい」

「あら？
被ってるじゃない」
「大丈夫だよ。
ちゃんと剥けるし
もう剥いても痛くないよ」
「そうなの？」
「見せてあげるよ、ほら」

「あら、ほんとだわ。
ちゃんと剥けてるね。
でも、この白いの
垢じゃないの？
しょうがないわね。
お母さんがおまんこで
きれいにしてあげる」

「裕太、ちゃんと剥けて、
亀頭も刺激に強くなったせいか、
ちょっと、おちんちん大きくなったんじゃないの？
それに、前よりすごく硬くなってるきがするわ！」
「ほんと？
じゃあ、きっとそれは、母さんが
毎日、剥く練習をしてくれてたおかげだよ。
ありがとね」

「何言ってんの。
息子を大人にするのは、
親として当たり前の事じゃないの」
「ほら、きれいになった。
これでもう包茎で
病気になる心配はなくなったわね」
おわり